

令和俳句論考

蒲生 友紀子

コスモス濃し子を置き旅にある日々は

和田 順子

平成元年しづかに冬の雨上り

(第一句集復刻 新装版『五月』より)

「繪硝子」三十周年を迎え、未読の会員に読んでほしいと上梓された。既に六冊の句集を刊行されている氏の原点である。心温まる旅のエッセイも掲載されている。一句目、昭和54年〜55年の作品である。コスモスの花畑には、白、薄桃色、濃い桃色がある子を置いてきての旅、何事につけ頭を過る。ふと濃い色のコスモスに目が止まる。子への思いは決して淡いものではない。「コスモス濃し」という現象が見事に心象を表している。二句目、御代が代わられたことへの挨拶句である。筆者も当時のことを思い出した。このような記念碑的な重みのある作品を静かに詠み、厳かな世界を表していることに魅力を感じた。

氏は「繪硝子」継承主宰。

人柄のよきかほ照らす春炬かな

丹羽 真一

鴨引くやマンシヨン群といふ隙間

(第五句集『猫の立ち寄る家』より)

第四句集上梓から十二年が経過、前句集からの未収録句が五万数千句、しほり込みに苦慮したとある。一句目、春炬のよき空間である。具体的な場所や人物はわからないが、周知の方でも、旅

での通りすがりの人でも、炬に照らされる笑顔、「春炬」が明るく温かい。氏の人を見る目は「歳の市隕石売の正直さう」にもある。二句目、とかく天へのびるマンシヨン群に目が行きがちであるが、「隙間」を詠んだところにひかれた。十二年の間に家族や作者にも様々なことがあり、写生句中心だった作風に心象句が混入してきたそうだ。「津波禍を見てきたものの夜長かな」銃弾は要らぬ蓮の実飛んで来い」の心象句にも心引かれた。

氏は「樹」代表。「樹氷」木魂集同人。

真つ直ぐに抜けて牛舎のつばくらめ

名久井清流

早池峰の風をたらふく鯉のぼり

(第一句集『春夏秋冬』より)

「最初にして最後の句集」とのこと。代表となつて句集がないのは会員の方に申し訳ないと思うからだそう。集中、平易な言葉でわかりやすい作品が並んでいる。一句目、なんとも気持ちの良い景である。おそらくこの牛舎はかなり大きい。それは燕が真つ直ぐに勢よく抜けるからである。作者は岩手県盛岡市在住である。二句目、早池峰の麓の景であろうか、雄大である。「水張つて我が田にもある岩手山」もある。また、「汝が降らす春雪なれば唇に受く」など、亡くされた奥様への句も心引かれた。

氏は「草笛」代表。

永遠に次の花火を待つてゐる

山田 径子

大輪の己が身ほどき牡丹散る

（第四句集『次の花火』より）

一句目、句集名になった作品である。一つの花火が終わり、次の花火が揚がるまでの間を詠まれたのかと思った。今ので終わりかと自問する。するとひゆるひゆるひゆると音がして玉が揚がっていく様が見え再び浮き立つ。花火が本当に終わっても、家路につきながら、翌年の花火をまた見に来ようと考えている。やはり永遠に待っているのである。氏は長く「未来図」主宰鍵和田柚子氏に師事した。その師が二〇二〇年に逝去、終刊となった。二句目はその追悼句である。牡丹の花が散る様を描写している写生句であるが、前書きがある。長年指導して頂いた方への敬意と憧れと喪失感が見事に表現されている。失意の中、とにかく俳句を詠み続けること、と自分の俳句を確立する決意をされたそうである。氏は「磁石」同人会長、「聞」会員。

サーファーに沖より波といふ未来

細山 柊子

思ひ出といふは厄介夜のジャスミン

（第一句集『たまゆら』より）

氏は定年が近づいた頃、社内の俳句部に誘われた。以来「俳句に才能があるとすれば、それは『続ける才』そのみ」と仰る向田貴子氏のもと研鑽を続けている。一句目、サーファーに来る波を「未来」と作者は言う。大いなる海、自然の為せる波はいつも同じではない。それを見極めて乗るのであろう。それは万人に訪れる予測不能な「未来」そのものでもある。そのとらえ方にひかれた。二句目、夜のジャスミンは濃厚な香を漂わせる。そして嗅覚は、もれなく思い出をよみがえらせる。作者はそれを「厄介」と感じた。まとわりついて離れなくなるようなそれだったのだろ

う。同様の経験を持つ人は多い。共感できる作品だった。

氏は「歴路の会」同人。「路石会」会員。

ボンジョルノ重ねうららの通勤路

西池 万葉

泳げども泳げども異国こいのぼり

（第一句集『雄鶏のパヴァロッティ』より）

集中、結婚、出産、子育ても窺える。「産み落とすいのち重たし春暁」胸を打つ表現が並ぶ。海外詠が多く、海外赴任でルーマニア・ギリシャ・イタリアなどで暮らしていたそうである。一句目、イタリア語の「こんにちは」をすれ違う人と交わしながら、のどかな春、徒歩での通勤。ちよつと羨ましい。よく様子が見え、季語が生きている。二句目は、その海外暮らしに辛さを感じたのだろうか。序文によると単身赴任だったそうで、お子さんへの思いが募ったのかもしれない。句集名は「雄鶏のパヴァロッティが春歌う」から。ヨーロッパの村では鶏をよく飼っている。とても良い声の持ち主だったそうである。

氏は「ひまわり」同人。

懐かしき癖字の手紙帰り花

後藤 美帆

（ブレ句集『冬薔薇』より）

曹洞宗会誌「禅の友」に掲載の中から自選の小冊子である。今後定期的に上梓、腕を磨いて第一句集に繋げること。掲句は二句一章の作品である。「懐かしき」が直接「癖字」にかかっている、今、懐かしい癖字の手紙が届いた、と解釈した。折しも咲いている帰り花との取り合わせが響いている。

氏は「鴻」会員

（筆者住所 〒309-1622 茨城県笠間市南吉原二七九一五）